慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一台湾原住民村落内に残存する日本語： 世代ごとの日本語能力の推移と村民の使用する日本語の特色
Sub Title	Remainder of Japanese language used in an aborigine village in Taiwan : transition of Japanese language ability by generations and specific characters of their Japanese language used by villagers
Author	中野, 裕也(Nakano, Hiroya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.74, (1998. 6) ,p.167(192)- 184(175)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00740001-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一台湾原住民村落内に残存する日本語

——世代ごとの日本語能力の推移と村民の使用する日本語の特色——

中野　裕也

Remainder of Japanese Language used in an Aboriginal Village in Taiwan—Transition of Japanese Language Ability by Generations and Specific Characteristics of the Japanese Language used by Villagers—

Hiroya Nakano

1．はじめに

日本植民地統治下の台湾における台湾原住民[1]に対する日本語教育は非常に高い成果を上げたと言われるが，これまであまり研究されることがなかった。そこでかつて特殊行政区域内[2]に指定されていた原住民の一村落をフィールドとし，当時の日本語教育の状況と村内に残存する日本語について調査を行なった。

この内，当時の教育の状況に関しては，既に拙稿[3]において報告済みであるので，本稿では村内に残存する日本語について，特に世代ごとの村民の日本語能力の推移と村民の使用する日本語の特色の二点に関して報告することにする。

2．調査の概要

本稿で扱うデータは以下の調査により収集した。

(a)調査地：台湾省高雄県茂林郷多納村。（旧高雄州旗山郡トナ監督区トナ社。）

多納村は高雄県の山間部に位置する村落で，村民人口は1996年末で539人であり，その大半がルカイ族である。

(b)調査期間：1997年２月20日～３月11日

＜表１＞被調査者の生年，性別，出身村，学歴，及び各言語能力

				日本語による教育での学歴				北京語による教育での学歴						日本語能力	ルカイ語能力	北京語能力	日本語の各能力			
番号	生年	性別	出身地	教所	夜講	農講	他	国小	国中	高校	専科	他					話す	聞く	読む	書く
1	1912	女	多納村											0	4	0	0	0	0	0
2	1914	男	多納村	2	参加									4	4	0	3	3	2	2
3	1917	女	多納村	4	参加									4	4	1	3	3	3	3
4	1918	男	多納村	1	参加									4	4	3	3	3	1	1
5	1919	男	多納村	4	参加	1	06							4	4	3	3	3	3	3
6	1920	男	多納村	4	参加									4	4	3	3	3	3	3
7	1922	男	多納村	4	参加									4	4	1	3	3	3	3
8	1926	男	多納村	4	参加									4	4	3	3	3	3	3
9	1926	男	多納村	4	参加	1	1							4	4	3	3	3	3	3
10	1926	女	多納村	4	参加									4	4	3	3	3	2	2
11	1929	女	多納村	4	参加									4	4	3	3	3	3	3
12	1929	男	多納村	5	参加		03							4	4	4	3	3	3	3
13	1930	女	多納村	5	参加									4	4	3	3	3	2	2
14	1930	女	多納村	5	参加									4	4	3	3	3	3	3
15	1930	女	萬山村	2	参加									4	4	2	3	3	1	1
16	1931	男	多納村	6								1		4	4	4	3	3	3	3
17	1936	女	多納村	3				3						3	4	3	3	3	1	1
18	1938	男	多納村	06				6						4	4	3	3	3	1	1
19	1938	男	多納村	1				3						4	4	3	3	3	0	0
20	1940	男	多納村					6	3		5			2	4	4	2	3	2	2
21	1941	女	茂林村					6						3	4	4	2	2	1	1
22	1943	男	多納村					6				2		3	4	4	2	2	1	1
23	1943	女	茂林村					6						4	4	4	3	3	1	0
24	1944	女	青葉村					6						2	4	4	1	2	0	0
25	1944	男	多納村					6						3	4	2	1	2	0	0
26	1945	女	多納村					6						3	4	4	2	2	0	0
27	1947	女	多納村					6						3	4	4	2	3	0	0
28	1951	女	茂林村					6						2	4	4	1	1	0	0
29	1951	男	多納村					6	3	3				1	4	4	1	1	0	0
30	1951	男	多納村					6						3	4	4	2	2	0	0
31	1951	女	茂林村					6						1	4	4	1	1	0	0
32	1956	男	多納村					6						2	3	4	1	1	0	0
33	1958	男	多納村					6	3		2			2	4	4	1	2	0	0
34	1959	男	多納村					6						2	4	4	1	1	0	0
35	1959	男	多納村					6						2	4	4	1	1	0	0
36	1960	女	多納村					6	3	3				1	2	4	0	1	0	0
37	1961	女	多納村					6						1	3	4	0	0	0	0
38	1962	男	多納村					6	3					3	4	4	2	2	0	0
39	1965	女	多納村					6	3					1	2	4	0	0	0	0
40	1969	女	多納村					6						2	2	4	1	1	0	0
41	1969	女	多納村					6	3					1	3	4	0	0	0	0

42	1971	男	多納村					6						1	4	4	0	0	0	0
43	1971	男	多納村					6	3		5			1	4	4	0	0	0	0
44	1974	女	佳義村					6	3	3				1	2	4	0	0	0	0
45	1975	男	多納村					6	3	3				1	2	4	0	0	0	0
46	1975	女	多納村					6	3		5			1	4	4	0	0	0	0
47	1976	女	多納村					6	3	3				1	2	4	0	0	0	0
48	1976	女	多納村					6	3					1	2	4	0	0	0	0
49	1977	男	多納村					6	3	3				1	2	4	0	0	0	0
50	1979	男	多納村					6						1	4	4	0	0	0	0
51	1982	男	多納村					6	3					1	3	4	0	0	0	0
52	1985	女	多納村					6						1	3	4	0	0	0	0
53	1985	男	多納村					6						0	2	4	0	0	0	0
54	1986	女	多納村					6						0	1	4	0	0	0	0
55	1986	男	多納村					6						1	2	4	0	0	0	0
56	1987	女	多納村					4						0	1	4	0	0	0	0
57	1988	女	茂林村					3						0	1	4	0	0	0	0
58	1988	男	多納村					4						0	1	4	0	0	0	0
59	1988	男	多納村					3						0	0	4	0	0	0	0
60	1989	女	多納村					2						0	0	4	0	0	0	0
61	1990	女	多納村					1						0	0	4	0	0	0	0

学歴　教所…教育所　夜学…夜間講習　農講…農業講習所
国小…国民小学校　国中…国民中学校　高校…高等学校　専科…専科学校
尚，学歴の各数値は在籍年数を表し，夜学の項の参加は参加していたことを表す。

(c)被調査者及び調査方法：

・調査１「村民の世代ごとの日本語能力の推移について」

被調査者は７才から85才までの村民61名で，多納村に嫁いできた女性１名を除いて全員ルカイ族である。これらの被調査者を個別に訪問，面談し，学歴や使用できる言語（ルカイ語，日本語，北京語）の能力等に関してアンケート調査を行なった。各言語能力については被調査者の自己評価とアンケートの際の会話力等を考慮して５段階に分類した(4)。さらに日本語能力については会話力と読解，表記に関してもそれぞれ４段階に分類した(5)。被調査者の整理番号，出身村，生年，性別，学歴，及び調査結果については表１としてまとめた。

・調査２「村内に残存する日本語の特色について」

調査１の被調査者で，教育所に在籍した経験を持つ人々を対象として，かつての生活様式や教育所で受けた教育等に関するインタビューを

＜表２＞被調査者の略号，性別，生年，日本語学習歴，及び日本語を使用しての職歴

番号	被調査者略号	性別	生年	日本語学習歴	日本語を使用しての職歴
5	P・P	男性	1919年	教育所４年・農業講習所１年	トナ駐在所で警丁として勤務。後に巡査として台東に赴任。
6	M・K	男性	1920年	教育所４年	高雄州の京都大学演習林に５年勤務した後，海軍軍属となる。
9	D・T	男性	1926年	教育所４年・農業講習所１年	トナ駐在所で警丁として勤務。後に高雄州の警備隊に入隊。
14	M・R	女性	1930年	教育所４年・補習科１年	無し
16	T・R	男性	1931年	教育所６年	無し
17	P・S	女性	1936年	教育所３年	無し

行なった。その際の録音の中から日本語学習歴の異なる６名（男性４名，女性２名）を選んで被調査者とし，各人200発話（約15分。内１名は175発話，約13分）ずつを抽出して分析を行なった。６名の整理番号，氏名に基づく略号，性別，生年，日本語学習歴，及び日本語を使用しての職歴については表２としてまとめた。

３．日本語能力の推移

３．１．村民の母語以外の言語の学習経験

次に被調査者の母語以外の言語の学習経験について整理しておくことにする。

多納村の村民は1926年に日本語教育が開始されるまでは，他部族と接触する例外的な場合を除いて，この地域一帯で使用されているルカイ語の一方言のみを使用していた。

しかし1926年に多納村内に教育所が開設され，日本語教育が開始されてからは，児童の教育所への就学が強要されるようになり，1935年には村内の就学率は100％となった。教育所の就学年令は７才以上で，就学期間は当初は４年間であったが，1942年には補習科１年が加わって５年間となり，1943年には６年間となった。

さらに1935年頃からは教育所を卒業した青年や未就学の成人に対して

も，村内で国語講習所等の夜間講習が行なわれるようになり，また一部の村民は教育所を卒業後，上級学校である農業講習所に進学した。

1943年末の統計によると，教育所の在校生と卒業生の合計は当時の村民人口の44%に達していた。この他に国語講習所等の受講者もいたわけであるから，この時点までに村民の過半数が日本語教育を受けていたことになる。

しかし1945年，日本の敗戦とともに一切の日本語教育は廃止され，学校教育は全て台湾の新たな公用語となった北京語に切り替えられた。これ以後，村民が日本語教育を受ける機会は失われ，日本人と接触することもほとんど無くなった。

戦後に就学年令に達した世代は，全員が少なくとも村内の6年制の小学校で義務教育を受けている。村内には小学校しかないため，上級学校への進学は現在でも困難を伴うが，1970年代中頃から村外の中学校への進学が一般化し始め，1980年代後半からはそれ以上の上級学校への進学も珍しくなくなっている。

3．2．村民の世代ごとの日本語能力の推移

それではこうした環境の中で村民の日本語能力は世代ごとにどのように変化しているのであろうか。

表1によると，直接日本語教育を受けた60才以上の世代では，現在でも高い日本語能力が維持されており，それ以降の世代で徐々に能力の低下が見られる。しかし日本語教育を受けていない世代でも，一定の会話能力を有する場合があり，概ね50才以上の被調査者はアンケートの質問に日本語で回答することができた。

しかし50才代の世代では，直接日本語教育を受けていないため，読解，表記の能力では極端に低い数値を示している。そして40才代では断片的に日本語を聞いて理解できる程度となり，それ以下の世代では日本語は母語に含まれる借用語[6]だけとなる。そして15才未満の世代ではそれすらも理解できなくなっている。このように若年層の村民ではかつての日本語教育

の痕跡がほとんど消滅している。

同様に言語能力の衰退は，母語であるルカイ語にも見られる。若年層でルカイ語に含まれる日本語からの借用語が理解できないのは，こうしたルカイ語能力そのものの低下によるためである。

ルカイ語能力の低下は村民の進学による村外への転出と時を同じくして始まっている。しかしこうした事情以上に日本語や母語能力低下の要因となったのは，原住民社会内での北京語の浸透である。

多納村の場合でも，50才代以下の世代では全員が北京語について高い能力を有していると自負している。従ってこの50才代を境目として村民の第二言語が日本語から北京語に切り変わっていることがわかる。

以上，概観してきた表１の日本語，ルカイ語，北京語の能力を示す数値を線形近似曲線で表し，さらに被調査者の学歴を棒グラフにして組み合わせたものが図１である。図１からはこうした各言語能力間の相関関係について容易に読み取ることができる。

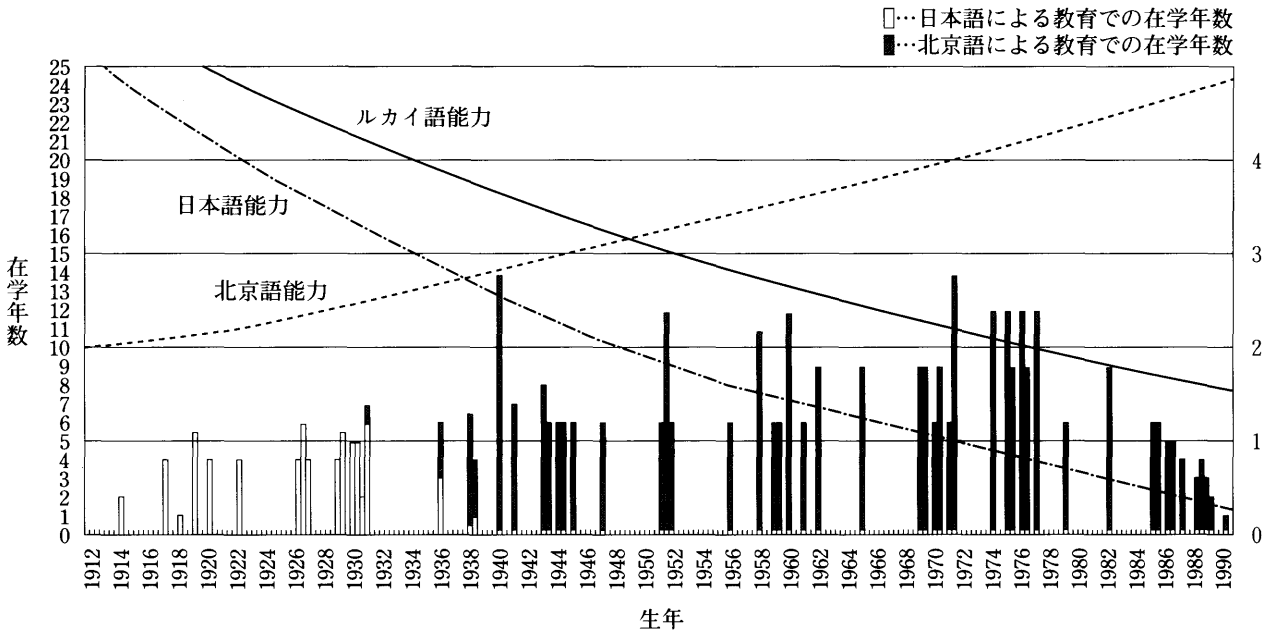
さて，多納村では50才代以上の村民によって一定の日本語能力が維持されていることが確認できたわけだが，戦後，50年以上も日本人とほとんど接触していない状況下で，どうして村民の日本語能力の維持が可能だったのであろうか。

この点について明らかにするために，高い日本語能力を有する被調査者に対して，現在の日本語の使用状況に関するアンケートを行なった。その結果，最も多かった回答は，村外に居住する者で日本語能力を有する相手と遭遇した場合に使用するというものだった。この回答から原住民社会の一部では，現在でも尚，日本語を公用語として使用していることがわかる。

また意外だったのは，村内の高齢者同士でも往時を懐かしんで日本語を使用するという回答があったことだ。つまり多納村では村民間でも日本語を話すことによって日本語能力が維持されてきたのである。

それでは次にこうした多納村民の使用する日本語の特色について分析を進めることにする。

〈図１〉被調査者の学歴、及び各言語能力



4．村民の日本語の特色

4．1．聞き手配慮に関するカテゴリー

4．1．1．丁寧体と普通体

調査2において採取した6名の被調査者の200例ずつの発話（P・Sについては175例）の，特に発話末に関して分析を行なった結果，以下のような特徴が見られた。

まず，品詞性毎に分類し，さらにそれを丁寧体形式（デス・マス）と普通体形式に分類したものが表3である。表3から次のことがわかる。

全ての被調査者の発話において，文末における丁寧体と普通体の切り替えが目立つ。そしてT・Rを除く全員で普通体が大半を占めており，特にP・PとP・Sでは丁寧体形式がほとんど見られない。特に敬語表現に関しては，わずかにP・Sの

(1)遊びいらっしゃい。(P・S)

が1例あるだけであり，これとて多納村では慣用句に過ぎない。

＜表3＞述語の品詞性，及び丁寧体形式と普通体形式の使用例数

		P·P	M·K	D·T	M·R	T·R	P·S
動詞述語文	丁寧体	2	16	26	21	58	5
	普通体	102	117	46	56	9	59
形容詞述語文	丁寧体	0	2	0	5	11	2
	普通体	15	14	13	17	2	30
名詞述語文	丁寧体	0	2	14	8	41	1
	普通体	56	37	71	46	43	35
感動詞	丁寧体	0	0	0	1	4	0
	普通体	23	8	25	35	29	42
その他		2	4	5	11	3	1
合計		200	200	200	200	200	175

注：その他とは文末まで述べられていない発話等を指す。

全体として丁寧体と普通体の切り替えに関する特定の規則性は見い出せない。また会話の大半が普通体によって構成されるという傾向に関しては，M・R，P・Sの例から性差は見られない。

さらに普通体の発話例では，動詞や形容詞の何も後接しない終止形や，名詞のみによる発話末が多用されている。

(2)あの，日本語のいい人と出会ったら，やっぱり日本語使う。(動詞述語文　P・S)

(3)とっても，あの，日本語になったらとっても恐ろしい。(形容詞述語文　M・R)

(4)この高雄州が集まった時に，彼はこの高雄州の青年団長。(名詞述語文　D・T)

こうした用法を最も多用しているP・Pでは，動詞述語文104例中26例(25%)，形容詞述語文15例中10例（67%），名詞述語文56例中38例（88%）であった。また他の被調査者についても，特に形容詞述語文や名詞述語文でこうした用法を多用する傾向が見られた。(表6参照)

4．1．2．伝達的なモダリティー（文末詞）

次に伝達的なモダリティーを示す文末詞についてだが，そのバリエーションごとの使用例数を表4として整理した。

表4が示す通り，文末詞は各被調査者に使用されているが，その使用頻度，及びバリエーションには個人差がある。使用頻度についてはT・Rの200例中105例（52.5%）からP・Sの175例中26例（14.9%）までの開きがある。またバリエーションについてもP・Pの7種からP・Sの3種までの差があった。そうした中ですべての被調査者に使用されている文末詞は「ヨ」,「ネ」,「カ」であった。殊に「ヨ」は各被調査者に多用されており，先のT・Rで66例，P・Sでも19例であった。

この「ヨ」の用法は判断を主張したり念を押す場合などに限られている。

(5)その時ね，山の人がやっぱり先生になっていますよ。(T・R)

<表4>各被調査者が使用した文末詞とその使用例数

		P・P	M・K	D・T	M・R	T・R	P・S
ヨ	丁寧体	0	0	12	17	61	0
	普通体	28	35	5	33	5	19
ネ	丁寧体	0	0	0	1	15	0
	普通体	1	2	15	21	19	6
カ	丁寧体	0	0	1	3	5	0
	普通体	1	0	0	0	0	1
カネ	丁寧体	0	0	0	0	0	0
	普通体	1	2	3	2	0	0
その他	丁寧体	0	0	0	0	0	0
	普通体	3	2	0	1	0	0
合計		34	41	36	78	105	26

その他…P・P（モン，ナ，カナ），M・K（モン，ナ），M・R（ワ）

(6)あのー，パツグラウって私だよ。(P・P)

このように文末詞に関しては，限定されたバリエーションと特定の用法の範囲内で使用されるという傾向がある。

4．2．命題内容に関するカテゴリー

4．2．1．肯定と否定

各被調査者の否定の表現形式，及びその使用例数については表5にまとめた。

表からは各被調査者が否定の表現能力を有していることがわかる。しかし「マセン」はわずかにT・Rの1例のみであり，他は全て「ナイ・ナイデス」または「ン」によって構成されている。この内，「ン」による否定はP・P，M・R，P・Sの三名によって使用されていたが，その使用例は全て「ワカラン」であった。

(7)しかしあの，どこ行ったかわからん。(P・P)

(8)どんな着物かわからん。(P・S)

従って「ン」の用法は非常に固定化されたものであると言える。

＜表５＞各被調査者が使用した否定表現形式とその使用例数

		P･P	M･K	D･T	M･R	T･R	P･S
動詞述語文	～ナイ・～ナイデス	2	18	5	9	4	16
	～テナイ・～テナイデス	0	0	1	3	3	6
	～ン	2	0	0	1	0	5
	～マセン	0	0	0	0	1	0
形容詞述語文	～クナイ・～クナイデス	0	0	2	5	0	0
	～デハナイ・～デハナイデス	0	2	0	0	0	0
名詞述語文	～デハナイ・～ジャナイ	1	2	1	1	0	0

否定表現の中で母語話者が違和感を覚える用法として，動作を否定する際に単に「ナイ」と回答する例があった。

(9)Q：教育所で（警官の）奥さんも教えましたか。　A：ない。(D・T)

(10)Q：毎日，日本語を話しますか。　A：ないない。(P・S)

(Qは中野による質問，Aは被調査者の回答を表す。)

こうした使用例は，P・P，D・T，R・M，P・Sで計17例とかなりあり，特に「ナイナイ」と重複させる例が多かった。この重複という点に着目すると，類似の表現に感動詞の重複がある。

(11)Q：高雄州の国語演習会に行ったんですか。　A：はいはい。(T・R)

(12)Q：片仮名は読めますか。　A：そうそう。(P・S)

同様の表現はM・K以外の各被調査者に見られ，そのバリエーションも，「ハイハイ」，「ソウソウ」，「エーエー」，「ウンウン」と多様である。こうした重複は母語，もしくは北京語の影響かと思われるが，これらの感動詞の否定表現として「ナイ」とその重複が存在しているものと思われる。

４．２．２．各述語文のカテゴリーとその形式

被調査者の各述語文の発話末におけるカテゴリーとその形式の使用度数に関しては，表６にまとめた。各カテゴリーに関しては以下のような特徴が見られた。

a．テンス

各被調査者共にタ形を使用できる能力を有していた。しかし各被調査者の発話の中には過去に生じた事例を現在の時制によって発話している例が散見された。

⒀前は警丁と言うでしょう。（正：「言った」 D・T）

⒁日本人はとっても厳しいよ。（正：「厳しかった」 P・S）

こうした例は各被調査者の発話内に多数存在しており，例えば動詞述語文においては，最多のM・Rで77例中37例（48%），最少のP・Pでも104例中26例（25%）であった。そしてこれらのすべてが過去の事例を現在の時制によって発話したものであった。このことから各被調査者は過去の時制を表現できる能力を持ちながら，その使い分けの際に混乱が生じていることがわかる。

b．アスペクト

＜表６＞各述語文のカテゴリーとその形式の使用例数

		P·P	M·K	D·T	M·R	T·R	P·S
動詞述語文	～タ　(テンス)	48	20	15	13	22	6
	～テイル・テイタ (アスペクト)	5	27	18	24	12	11
	テ形＋補助動詞　(アスペクト)	1	7	1	3	1	2
	可能形　(ヴォイス)	0	7	0	5	0	3
	受け身形　(ヴォイス)	0	6	0	3	0	0
	使役形　(ヴォイス)	5	4	0	2	1	1
	願望(～タイ)　(ヴォイス)	0	1	0	0	0	0
	何も後接しない単純ル形(辞書形)	26	25	4	4	4	15
	何も後接しない単純ナイ形	2	5	1	2	3	11
	マス形	0	1	13	11	22	3
形容詞述語文	～カッタ　(テンス)	1	1	0	1	1	0
	何も後接しない単純イ形	6	4	10	7	1	17
	何も後接しない単純ナ形	3	1	1	1	0	0
名詞述語文	～ダッタ　(テンス)	1	1	2	1	0	0
	何も後接しない単純名詞	38	16	50	21	26	21

アスペクトを表す表現としては「テイル／テイタ」と「テ形＋補助動詞」が使用されている。

この内，「テイル」は全ての被調査者が使用しているが，上述した時制にまつわる混乱があり，本来「テイタ」を使用すべき所で「テイル」が使用されている例が多い。

(15)遠い所に首取りに行ってね，この寒さに負けないように，ひもじくないように訓練をしているんだ。（正：「訓練をしていたんだ。」 M・K）

こうした誤用は各被調査者の発話に含まれているが，「テイタ」が正しく使われている例もP・P，M・K，D・T，T・Rで数例ずつ見られることから，やはりタ形と同様に混乱が生じているようである。

また「テ形＋補助動詞」では，「テイク」，「テクル」，「テアル」，「テシマウ」の発話例が一部の被調査者の発話内で数例ずつ見られた(7)。

c．ヴォイス

ヴォイスに関しては可能表現，受け身，使役，願望の「タイ」が使用されていた。

可能表現の使用例はM・K，M・R，P・Sに見られ，計15例であった。これら15例で見られる形式には，可能動詞によるものが7例。「助動詞（ラ）レル」によるものが1例。「スルコトガデキル」によるものが3例。「デキル」によるものが4例あった。

(16)私なんかのお父さんは（片仮名が）書けない。（「可能動詞」 M・K）

(17)まだきれいに別れてないから，やっぱり子供できたね。（「～デキル」 M・R）

受け身の使用例はM・KとM・Rで計9例見られた。この9例はいずれも直接受け身であり，間接受け身は見られなかった。また全ての例で動作主，被動作主の省略が見られたが，これらは前後の会話の内容から類推できる範囲であった。

(18)派出所の人に盗られたでしょ。（M・K）

(19)使ったら怒られるよ。（M・R）

使役の使用例はD・Tを除く各被調査者で見られ，計13例であった。こ

の内，自動詞の使役文が6例，他動詞の使役文が7例であった。自動詞の使役文については特に用法上の混乱は見られなかったが，他動詞の使役文では格助詞が省略されていたり，格助詞の使用が不適切である例が多かった。

⑳学校の生徒で頭の優秀な人をね，やっぱり学校の先生にやらしていますよ。(M・R)

さらに発話の際の視点の混乱も見受けられた。

㉑そん時の十五，六才なんて，やっぱり親から戒められてね，飯を食わさない。(正：「飯を食わせてもらえない」 M・K)

また使役受け身に関しては各被調査者を通じて一例も見られなかった。

最後に願望の「タイ」についてはM・Kが1例使用しているのみであった。

㉒ある子供は行きたいなんだ。(M・K)

また本来願望の「タイ」の否定表現を使用すべき所で「イラナイ」で代用している例がP・Sに1例見られた。

㉓勉強するのいらない。(正：「勉強したくない」 P・S)

同様に可能表現や受け身にも他の表現で代用しているケースがあり，可能表現でP・Pに1例，T・Rに1例，P・Sに2例，受け身でM・Rに3例，P・Sに1例見られた。

このようにヴォイスに関しては複雑な構文を簡略化して使用したり，回避したりする傾向が見られる。

4．3．命題の捉え方に関するカテゴリー

4．3．1．説明のムード形式

命題の捉え方に関するカテゴリーについては表7にまとめた。

まず説明のムード形式として使用されていたのは「ノダ」と「ワケダ」だけであった。この内「ワケダ」はM・Kだけが3例使用していた。

㉔（警察に）我慢言ってお願いしてね，まあ，明日は子供を学校に出しますから，まあ，鍋を返してくださいとこう言うわけだ。(M・K)

それに対して「ノダ」はP・Sを除く全員が使用しており，特にP・P，M・K，T・Rによって多用されている。

(25)で私はね，あの一，奥さんと結婚してね，私は養子に行ったんだよ。(P・P)

(26)日本時代，6年教育，卒業したんです。(T・R)

<表7>命題の捉え方に関するカテゴリーとその形式の使用例数

			P·P	M·K	D·T	M·R	T·R	P·S
説明のムード形式	ノダ	丁寧体	1	1	1	0	18	0
		普通体	21	40	0	2	1	0
	ワケダ	普通体のみ	0	3	0	0	0	0
判断のムード形式	デショウ	丁寧体	1	16	21	12	3	4
	ダロウ	普通体	0	0	2	0	0	0
	ラシイ	普通体のみ	3	0	5	0	0	1

こうした「ノダ」は様々なバリエーションを持つ。丁寧体では「ンデス」のみが使用されており，普通体では主に「ンダ」が使用されている。またこの他にM・Kにおいて「ノ」，「ノヨ」，「ノダヨ」，「ノカ」等の形が見られた。

4．3．2．判断のムード形式

判断のムード形式では「ラシイ」と「デショウ／ダロウ」だけが使用されていた。

「ラシイ」は推定を表す場合に限って用いられ，P・P，D・T，P・Sの3名によって合計9例が使用されていた。

(27)恐らく，あれ朝鮮人らしいんだ。(P・P)

これに対し「デショウ／ダロウ」は相手に対して念押ししたり，同意を求める場合に各被調査者によって広く使用されていた。

(28)今の，あの平地人でも，ある人は（日本語が）わからないでしょう。(M・R)

(29)山の人は，あの時まだ頭ないでしょう。(P・S)

しかし「デショウ」で推量を表している発話例は，わずかにT・Rに1例見られるだけであった。

(30)恐らくは死んだんでしょう。(推量…T・R)

このように「ラシイ」と「デショウ／ダロウ」に関しても特定の用法だけが使用される傾向にある。

さらに「デショウ／ダロウ」に関して注目すべきは，「デショウ」と「ダロウ」の使い分けである。普通体「ダロウ」の使用例はわずかにD・Tの2例に過ぎず，他の48例はすべて丁寧体「デショウ」である。上述したように，T・Rを除く各被調査者の発話の大半が普通体によって占められている中で，この「デショウ」の多用は不自然である。

各被調査者の丁寧体形式総数に占める「デショウ」の比率を見てみると，最も高い比率のM・Kではなんと20例中16例であり，他の被調査者でも高い比率を占めている。これらを考え合わせると，「デショウ」は丁寧体として発話されていると言うよりは，どちらかと言えば確認要求を表現するための文末詞的な使用がなされていると考えることができる。

5．まとめ

最後に上述したの二つの調査結果について以下のようにまとめることができよう。

調査1の結果により多納村における世代ごとの日本語能力の推移がほぼ把握できた。これにより台湾で一般に言われる「原住民社会では日本語教育を受けていない世代でも日本語が使用できる」といった概念が，多納村民に関してはある程度あてはまることが確認された。

調査2の6名の被調査者の発話末に関する分析結果からは，村民の日本語に関する一つの傾向を指摘することができる。それは多納村では第二言語話者にしばしば見られる各カテゴリーにおける簡略化，もしくは単純化がなされた上で日本語が定着しているという点である。

これまで見てきたように，聞き手配慮に関するカテゴリーでは普通体を

多用して会話を構成しており，伝達的なモダリティーでは限られた文末詞を特定の用法の範囲内で使用している。命題内容に関するカテゴリーでは，否定で「マセン」を使用していなかったり，ヴォイスでは複雑な構文を回避したりする傾向があった。そして命題の捉え方に関するカテゴリーの各ムード形式においては，限定された範囲内で特定の用法だけが使用される傾向があった。これらはすべて日本語の簡略化，もしくは単純化という同一の方向性を持つものである。

また今回の調査ではこの他に母語話者とは異なる特徴的な用法として，否定表現での「ナイ」の重複や「デショウ」の文末詞的な用法等，いくつか確認することができた。

こうした簡略化や単純化における規則性や特徴的な用法については今後さらに分析を進めていく必要性を感じている。またこのような多納村民の日本語の特色が，他の台湾原住民の村落においても普遍性を持ち得るかについては，今のところ判断する材料を持たない。この点についても今後，他の村落において同様の調査を推し進めていくことにより，明らかにしていきたいと考えている。

注

（1） 台湾のプロト・マレー系に属する先住民族を指す。

（2） 特殊行政区域とは原住民の部族の中で，アミ族とピュマ族以外の居住地域を指し，ヤミ族の居住する蘭嶼島を除いて主に台湾中央部の山岳地帯であった。

（3） 「植民地統治下の一台湾原住民村落における日本語教育史」中野裕也 1997年11月，慶応義塾大学『日吉紀要　言語・文化コミュニケーション』第19号

（4） [4：よくできる　3：ある程度はできる　2：ほとんどできない　1：わかる語がある　0：全くできない]

（5） 「話す」[3：よく話せる　2：ある程度は話せる　1：ほとんど話せない　0：全く話せない]

「聞く」[3：よくわかる　2：ある程度はわかる　1：ほとんどわからない　0：全くわからない]

「読む」[3：ある程度の漢字と平仮名，片仮名が読める　2：ある程

度の漢字と片仮名が読める　1：片仮名だけが読める　0：全く読めない]

「書く」[3：ある程度の漢字と平仮名，片仮名が書ける　2：ある程度の漢字と片仮名が書ける　1：片仮名だけが書ける　0：全く書けない]

この内，読む，書くの能力を測る際に片仮名，漢字，平仮名の順に優先順位を付けたのは，原住民社会内での普及の度合いを考慮に入れたためである。

（6）現在の台湾原住民諸語では，その語彙の中に多量の日本語からの借用語を含んでいる。多納村で使用されているルカイ語の中にどれだけの日本語からの借用語が存在するのかについては未だ調査中であるが，同じ台湾原住民言語であるアミ語に関しては以下の報告がある。

「台北県政府『阿美語図解実用字典』中の日本語からの借用語」前田均　1996年　天理　大学学報　第181輯

（7）各被調査者のアスペクトを表すテ形＋補助動詞の使用状況は以下の通りであった。

「テイク」…P・P1例，K・M4例。「テクル」…K・M2例，D・T1例，P・S2例。「テアル」…K・M1例。「テシマッタ」…M・R3例，T・R1例。

参考文献

『台湾高砂族系統所属の研究』台湾総督府　1935年

『蕃人教育概況』台湾総督府警務局　1935年

『高砂族の教育』台湾総督府警務局　1944年

「多言語社会としての台湾」　林　正寛『多言語主義とは何か』藤原書店1997年「旧南洋群島に残存する日本語文法カテゴリー」渋谷勝己『阪大日本語研究』9　1997年